
少女ジグザグ暴走中

上葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女ジグザグ暴走中

【Nコード】

N9861X

【作者名】

上葵

【あらすじ】

幼なじみのお願いで、昔学校にあった変なクラブの復活を手伝うことになったけど、正直ダルいので、また明日から頑張ればいいや。

0 (前書き)

長い生暖かい目で見守っていただければ幸いです。

基本テキストとしてはギャグ・シユール .. 真面目を6 .. 4 .. 0でお届け出来たらな、思っております。たぶんダメですが、その旨ご了承ください。

乾燥しきった埃まみれの気流が、カビ臭さを伴って俺の鼻孔を刺激した。

最悪だ、全くもってついていない。クリーム色のカーテンを透過する光にぼんやり照らされた室内は、ガラクタだらけの廃棄場のようで、用途不明の鉄パイプが墓標めいた影を落としている。

「骨が折れそうね」

ドアを開けた彼女はこれから始まる引越し作業を想像してか、げんなりとした息をはいた。

隣で関節の空気を抜くように伸びをする。冷静になっておかれた状況をまとめるのならば、

この学校にあったという変な部活に所属したいが、もうすでに廃部になっていたので、復活させるしかないでしょ、とのこと。

顧問していた先生に相談してみたところ、部員の確保と部室の掃除をやるなら、また担当してやってもいいと了承をくださったので、先ずは部室の確保に乗り出したというわけである。

「それじゃ、箒で床を払っておくから、郁次郎は一階の準備室に余った机を運んでおいて」

キラキラと反射する埃の粒子を鑑みるに掃き掃除は確かに必要だろう。だがしかし、それは床を荷物が占拠してなければの話である。

「ちょっとまでよ、俺の負担が半端くないか」

「気のせいよ」

「そうか、気のせいか」

ちなみに現在位置は三階、ここから一階の学習準備室までは天竺の道並みに遠い。

「なわけあるか！」

ワンテンポおいて叫んだ俺に冷めきった瞳で視線を贈る谷崎。殴るぞ。

「ちゃっちなノリツツコミい。天下への道のりは遠いわね。罰としてこの机を一階まで運びなさい」

「天下なんざ目指してねえーし。いいからそっちの端を持て。いっしょに運ぶぞ」

一番厄介そうな質量を持つ予備の教卓に手をかける。

「人にもものを頼むにはそれ相応の態度というものがあるんじゃない？」

「あのなら、俺はあくまでもお手伝いなんだぜ？」

「お手伝いさんなら、四の五言わずに作業をすべきね」

「完全善意のボランティアに対して多く求めないでください」

ぐちぐち言いつつ、机の端をしぶしぶ持つ。

整った顔立ちをもつ少女、谷崎琴音。彼女と仲良く会話できるだけで俺のパラメーターは他の人より多めにラックの種を食べたことがわかるのに、幼なじみともなれば、思春期を迎えた気分はラッキーマンだ。

「それじゃ、一階までね」

確認してから、教卓の予備を持ちあげる。夕焼けに支配された廊下をえっちらおっちら運んでいくそのさまは、端からみたらアリさんマークの引越しセンターのロゴのようになっていことだろう。こう、シルエットのね。

「このまま運んでもつまらないから、なにか歌でも歌わない？」

「歌？ どんنادよ」

黙々とした作業から出し抜けに提案してきた。背後に気を配りながら茜色が落ちた階段をくだる俺にそんな余裕はない。

「そうね、郁次郎が好きな曲でいいわよ。なにかない？」

「そうだな、んじゃ、森のくまさん」

とはいえ脳裡に天恵に等しいグッドアイデアが降りてくる。さすが、おれ。

「なんでもまた。流行歌とかでいいじゃない」

「ただし、あれだ。俺が本体の方歌うから谷崎は合いの手というか、替え歌の部分を歌ってくれよ」

「替え歌って、ある貧血―、みたいなの？」

「そうそう、そんな感じ。んじゃいくぜ、ある日」

「貧血―♪」

眉間にハテナのシワを寄せながらもしつかりと従ってくれる辺り彼女は天然だ。にやけが止まらない。

「森のなか」

「浣腸―♪」

「くまさんに」

「ニンニク―♪」

「出会った」

「たんこぶ―♪」

「花咲森の道」

「チ○コ」

よしやああー！いただきました！

普段クールぶってる谷崎さんの口から容易く卑猥な単語をはかせるなんて、やっぱり俺は天才かもしれない！

「くまさんにであつたあ」

「たんこぶ―、……ねえ、そんなににやけて、なにがいったい面白いの？」

「べつにいい」

知らなくてもいい世界というのがあるんだよ。

いやしかしこんなにもしれっと禁止用語吐くなんて彼女はバカなのかもしれない。

「一つ考えたんだけど」

もうなんていうか、戦後一週間の日本のほうがよっぽどきれいだよ！って感じの室内。

部室（便宜上そう呼ばせてもらう）に戻って、彼女は小さく呟いた。

「人手が、必要だと思うの」

「気づくのがおそすぎたね」

「やっぱり部員の確保を優先すべきだったかな」

まあ、まず誰も所属したいとは思わないだろうけどね。

気持ちを新たに、別の机に手を掛けて、一階まで持っていこうと、持ち上げる。ひたすらその作業の繰り返しだ。

その一つを担いだ時だった。斜めにしたからか、中に入っていたらしい古雑誌が滑り落ちて、パタンと床に転がった。

む、これは、

「谷崎」

「なによ」

拾い上げながら、一種感動に似た懐かしさが俺に去来する。

「休憩しようぜ！」

「もしかして、その手に持ったジャンプに目を通そうとしてるわけじゃないよね」

「四年前のだぞ、気になるだろ」

当時の連載陣を思い浮かべる。

「最近猫も杓子も新連載起こしすぎだよね。もうちょっと長い目で作品を見守っていかないと。つか、長期連載陣の引き延ばしが見苦しいよな。昔みたくなりがいいところで終わらせてやりやいのに」

「掃除続けるの！ほら、さっさと机を運ぶ！」

「えーい、うるさい！女にはカピカピになった拾い物の雑誌の価値がわからないんだー！」

俺の訴えはあえなく却下され、しかたなしに作業に戻る。

いくら若い体力をもて余していようと、数分もこんなこと繰り返してれば、ばっちり肩で息をするようになっていた。

「小学校の時の朝礼で一つ覚えてるのがあってさ」

階段の登り降りに膝が悲鳴をあげ始めた、そんな折り語りだす谷崎琴音女史。目が憔悴しきっている。

「ほら、校長が話すじゃない？その一つで」

「校長って、いつも朝礼が始まる前に、君たちが静かになるまで何分かかりました、って嫌味たらしく言うあのハゲ？」

「そうだけど……」

俺と彼女は同じ小学校の出身である。ちなみに幼稚園、小学校、中学校、高校までフルコンボで同じクラスだ。大学でも、もう一回遊べるどーん、とかになりそうで怖い。いや、喜ぶべきことなんだろうけど。

脱線した。とにもかくにもあの、あら瓶土瓶ハゲ茶瓶の愛すべき中年オヤジの話を、谷崎は切り出してきたのだ。

「校長いわく、道に落ちてるゴミを100個拾うのに100人いれば一秒ですむ」

「えーと、やっぱりイナバ、100人乗っても」

「違うわよ！」

「すまん、ちょっと何が言いたいのかわからない」

「ようは数は力。人は城、人は石垣。部員さえいればこんな苦勞ちやっちゃつとですむのに、ってこと」

「いやー、無理だと思うよ」

一度きりの高校生活を、訳のわからない倶楽部で消費したいと考えるバカはいないだろう。

「むう」と俺の意見が納得いかないらしい谷崎は頬を膨らませて、睨み付けてきた。

「どうしてそう思うの？」

「そもそも発足できるかも怪しいじゃん。落語部とか誰も興味ないし」

その部活の活動が、まったくもってふざけたものなのである。なんだっけ？古今東西あらゆる落語を追及する、だっけ？あほか。

「娯楽ら部！娯楽と倶楽部と愛するのLOVEがかかってるの！」

あ、そうか、そうそうそれそれ。

「いい加減覚えてよ。郁次郎も入ってるんだから！」

「おい、ちよっとまで。俺は協力するとは言ったが、一度も入部するとは言っていないぞ」

「協力するイコール入部でしょ。違う？」

「ちゃうわい！大体渡された診断テストみたいなのはビリビリにして、目の前で捨てただろ！」

今朝のことだ。俺の机に一枚の胡散臭いプリントが入っていた。抜粋して記載させてもらうと、

【Q、あなたの学校生活は充実していますか？

yes↓もっと充実させるため、娯楽ら部に入ろう！

no↓娯楽ら部なら明るい青春をおくれるよ！】

【Q、友達はいいますか？

yes↓本物の友情ってやつを娯楽ら部なら体験できる！

no↓娯楽ら部に入って友達を増やそう！】

【Q、娯楽ら部に入部しますか？

yes↓入部届けは1年2組谷崎蓮華まで！

no↓死ね！】

ちなみに俺は死を宣告されました。

進研ゼミの促進漫画や新興宗教の電話のがよっぽど信用度が高い。

「俺は部員が4人以上になったら入ってやる、それまではただの協力者だ！って言ったよな、確かに」

ちなみにうちの学校、羽路高校の最低部員数は5名であり、ようは、発足出来ないようなら諦めな、という幼なじみの良心的な線引きなのである。いや、正確には妥協である。

「私が四人分になる」

キリッ、って言われても。

「なにアホなこと宣ってはるんですか」

俺が今まで吐いてきた、ため息の数は、谷崎のアホな発言数でもある。

「部員ならいるじゃない。私たちの心のなかに」

「先生の前でも使える言い訳を用意しろよ」

「先生には私の隣の彼らが見えないんですか？てのはどう」

「スクールカウンセラー行きだと思う」

ああ、なんだって5月の新緑が美しく陽光降り注ぐ爽やかな季節に、幼なじみと放課後まで居残ってこんな不毛な会話をしてるんだろうか、俺は。

歯車が狂いだしたのは、そう、あの夏。何処までも純粹で清純だった当時13歳の谷崎琴音が出会った、あの女。端正な顔立ちの癖に馬鹿げたことを行うギャップに、なぜだか知らないが、中1の谷崎は無性に惹かれたのだ。そのバカ女が件の倶楽部所属だった、ただそれだけのこと。

「決めた！」

「訊きたくないけど、訊いとくよ。なにが？」

以来、俺の幼なじみは誰もが羨む美少女から、変なことを行う残念美少女に降格してしまったのだ。その女の人と『私、必ず羽路高校行つて、倶楽部に入ります！』と指切りげんまんしていた蓮華の指を、過去に戻れることならそつとほどこいてやりたい。

「本気で勧誘をしよう！」

「初めて具体的な方策が飛び出したところ悪いんだけど、部活のスカウト週間は4月に終わっちゃってるよ」

ちなみに一ヶ月間、彼女はなにしてたかというと、倶楽部を探し回ってました。そんな出落ちみたいな部活が生き残ってるわけないでしょうが！

それから30分くらい机の片付けを行い、どうにかこうにか部屋としての体裁を取り戻した室内は、残すところ掃き掃除と拭き掃除を行うだけとなった。疲れてあげることのできなくなった腕をダランダランと杓死のように揺らしながら、

「この地球儀とか本はそのまんまでいいのか？」

「それらは部室の備品よ。そのままにしといて」

「この段ボールに手書きの日本地図はゴミ箱でいいだろ」

「ため！そのままにしとくの！」

埃を被ったガラクタの処分について聞いていく。絶対この部屋自体が他の部活の物置にされてただけだって。元からあったもんじゃねーだろ。

「はぁー疲れたー」

とにもかくにもようやく物運びが終わったのだ。パイプ椅子に腰掛け、白い長テーブルに伏せるように体を伸ばす。

「今日はもう帰ろーぜ」

「そうね」

日はすでに落ち、白暗闇に室内は支配されている。さっさと帰って寝たい。

「郁次郎、今日はありがと」

「どーいたしましてー」

「それじゃ、明日は部員勧誘頑張りましたよ」

「……」

こいつ話聞いてなかったな。

「だから勧誘期間は終わってるつうの。残された手段は精々ポスター貼るくらいしかねーよ」

顔をガバリと上げて異議を申し立てる。先程もそう申しましたよね。

「私たちがするのは勧誘じゃないの」

やべえ、たち、って俺も確実に部員にカウントされてるよ。

「引き込みよ」

「はあ？」

「だから、狙った人物は確実に引き込む。以上」

「つまり勧誘じゃないと？」

「ええ、引き込みですもの」

「勧誘です！」

世間ではそういうのを勧誘って言うんです。

「だから私は明日までに娯楽ら部にピッタシの人物を選別しておくわ」

わあお、クレイジー。

時計を見れば、もうすでにいつもの帰宅時間を一時間以上もオーバーしていた。これ以上ここでグダグダやっていると、サラリーマンの帰宅ラッシュに巻き込まれてしまう。

なんだか要領を得ないまま、俺たちの娯楽ら部復活記がスタートしたのであった。

1..プラネットウェイプス(1) (前書き)

どうでもいいですが、ストックがこれにて終了です。

綴っていた第三話は不手際により消滅してしまいました。

書き直します、がんばります。

やっつけられっかー!!

1..プラネットウェイプス(1)

改札を潜ろうとポケットから定期を取り出したところ、申し合わせたように鈴を鳴らしたみたいな声が背後からかけられた。

「いくじろー」

聞き間違えるはずもなく、我が幼馴染み、谷崎琴音に相違ない。振り返ると手をブンブン振りながらこちらに駆けてきているところだった。

「つかれたー」

俺に追い付き、前屈みで呼吸を整えている。

「朝っぱらから元気澆刺だな」

「先に行っちゃうなんて酷いじゃない」

「……別に約束してないし」

加えて言うならそんな習慣もない。幼馴染みが朝起こしてくれるとか、どこの幻想だよ。

「おばさんにもう家出たよ、って言われて慌てて追いかけたんだから」

「そんな記念すべきイベントがあるなら前の方にアポイントいれといてくれ！」

「いべんと？どういう意味よ？」

自らの心情を吐露しすぎた。憧れのシチュエーションを逃すなんて、というお馬鹿120パーセントの邪な感情だ。まあ、いっしょに登校というのもポイント高いからいいけど。

「いや、なんでもねえ。そんでどうした、なんか用事があるんだろ？」

「そうよ、そう。ほらこれ」

谷崎は鞆から数枚のプリントの束を取りだし、俺に差し出した。「なんぞこれ、リスト？」

一組から順々に名前が書いてある。疑問なのは数名の名前の横に赤ペンで丸がつけられていることだ。そんなかに自分の名前があることに気付いてどきりとする。

「昨日約束したじゃない」

「うむ？」

「娯楽ら部の勧誘リストよ」

凄くいい笑顔で俺の不安を払拭させた彼女はまた新たな不安を植え付けた。

なんて最悪な赤ペン先生。FBI捜査官リスト並みに不吉だ。

電車に揺られて数分、学校の最寄り駅に到着した。キオスクで昼食のパンを購入し駅構内を出て、一路羽路高校を目指す。本格的に授業が始まりだしたのだ。幼馴染みと馬鹿げたことにうつつを抜かす暇はない。黙ってれば誰もが羨む美少女なのに、頼むからこれ以上要らぬ心配を増やさないでほしいところだ。

「これって入学の時に配られたクラス名簿だよな」

電車に乗る前に渡されたリストを歩きながら取りだし、もう一度目を通して見る。

通学路は制服を着こんだ連中の大名行列みたいになっていた。パッと新しい制服に身を包んだ一年の表情はみな晴れ晴れとしていて、その一方、俺の憧れのスクールライフへの第一歩を踏み外した感否めない。

「チェック入ってる人が勧誘対象の有力候補なんだよな」

「ええ」

首肯する。だったら俺のチェックを外してくれ。

「どんな基準でチェック入れたんだ？」

丸がつけられた生徒たちにこれと言った共通点は見られない。男女比もバラバラだし、クラスごとに選ばれた人数もまちまちだ。

「6組なんて一人もチェックはいてないじゃん。あ、もしかしてもう既に部活入ってる人は除いたとか」

「名前がかっこいいひと」

「……」

1組、天王洲愛流、龍造寺海月、六角海星、島津いるか、大友心太……。

一組だけでお腹いっぱいなラインナップだ。チェック入った人たちには悪いが、海洋類が約三名いらっしやる。なんだよクラゲにヒトデにイルカ、とこてん!? もはや隠す気ゼロだなっ!?

「珍しい苗字と名前の人を優先的に勧誘した、ってわけ? 珍名クラブでも作る気か?」

「だってほら、苗字がかっこいいと選ばれし者、みたいな感じするじゃん」

「おめえ、『谷崎』だろ」

「……」

多くはないが決して珍しい苗字ではない。

「でも、郁次郎は『海野』じゃん。珍しいじゃん!」

「そうかあ、けっこういるだろ。って、俺はまだ入部してないっての!」

あつぶねー、普通に流されるところだったぜ。

「それに、珍しい苗字のなかに普通の苗字が混じれば紛れてわからなくなるわ。谷崎だってきつと!」

「よけい浮くっての!」

「でねっ、私がいま一番注目してるのがこの人」

俺の言葉を見無視して、プリントの一名を指差す。

「よりにもよって『天王洲アイル』かよっ!」

ああ、突っ込まないようにしてたのに!

憂鬱な現状に頭を抱えながらも、時間はジクジク過ぎていく。というわけで中休み、件の天王州さんをサンクガーデンに呼び出したという報告にガックリ肩を落しながら、俺たちはベンチに腰掛け、彼女が来るのを待っていた。そういってただけ無駄に行動力あんな。

「天王洲さんは、かの有名な16財閥の一つ愛流コンツェルンの末裔で英才教育を施された天才美少女なのよ」

待ち合わせまでの間、天王洲愛流なる人物の基本情報のレクチャーを受ける。

ひょっとしてギャグで言っているのか？愛流コンツェルンなんて聞いたことないぞ。

って、おもっくそバカにしたら事業内容をこと細かに説明された。割愛。

「ともかく愛流さんについてね。一人称は『ぼく』、双子で妹。一組ではクラス委員長を務めてて、容姿はかなりの上玉、黒髪ロングでスタイル抜群。性格は若干天然が入ってるらしいわ」

「一人でどれだけキャラ立てするんだよ！欲張りすぎだろ！」

「ねっねっ！絶対欲しいでしょ？」

「そんなやつが近くにいたら俺の個性が無個性になっちまうじゃねえか！」

「天王洲さん一人で百人力よ！倶楽部に絶対必要なの！そう思わない？ねえ！？」

物凄い勢いで同意を求められる。

「いや、まてまてまて、そんな完璧超人、まだ設立されてもない部活に入ってくれると思うか！？」

「ふふふ、ネゴシエーターの血が騒ぐわね」

「お前のオヤジ市役所公務員じゃねーか！」

母親は専業主婦である。

「あっ、きた！」

「交渉はてめーがやれよ！」

絶対断られるだろうけどな！

ふわりと春風をまといサンクガーデンに現れた少女は、まるで文学作品のヒロインみたいな清純さをその身から溢れさせていた。腰

まで垂れたつやのある長い黒髪、肌はきめ細かく雪のように真っ白だ。深窓の令嬢といった体、蝶よ花よと育てられてきたに違いない。頭で彼女のステータスを反芻してみる。

委員長、妹（双子）、お嬢様属性！ロリ巨乳（たったいま判明）。「僕を呼び出したのは君たちかい？」

加えてぼくっ娘。リアルで会うと痛々しいとは聞いてはいたが、別段気にはならない。アルル以外に嫌悪感を抱かない人物がこの世にしようとは！

彼女は少しも不機嫌そうな表情をせず、不気味な穏やかさをもって俺たちにそう問いかけた。

「ええ、私は二組は谷崎琴音。こっちの呆けてるのが海野郁次郎よ、よろしくね」

「僕は一組の天王州愛流」

右手を気さくに差し出してくる。それを谷崎は両手で受け取りブンブンと上下に揺らした。

「それで用というのは？こう見えてもなかなか忙しくてね。要件は手短にお願したいんだが」

「合点承知の助。それじゃ単刀直入にお聞きするわ。天王州さん、ズバリ、クラブに入ってる？」

まじで核心ついたな、と横で感心する。その質問に一瞬キョトンとしていた天王州さんは、数秒してから妙な笑みを浮かべた。

「これは勧誘かな」

はやくも感付かれたっ！返答次第で、勧誘自体なかったことにされる。でもどう答えていいか、わからない。極限まで張りつめた空気のなかで、谷崎が選択した答えはっ……、

「ええ、娯楽ら部にはいって！」
偽らないことであつた。

ストレートに吐き出された谷崎の回答に天王州さんは数秒ポカンとしていた。

「娯楽ら部？聞いたことのない部活だが」

「古今東西三千世界、娯楽を通じ無明の煩惱を追求する、古来より続く、由緒正しき部活よ！」

もしかして相手がお嬢様だからそれに合わせて活動内容もパワーアップしてるのか？

「僕か覚えている限り、そんな部活はなかったような気がするんだが」

「メンバーはまだ、私と、その郁次郎と天王州さんしかないわ。だから今なら望む地位を与えることが出来るってわけ」

ナチュラルにメンバーに加えられている俺と天王州さん。

「む。三人、ということはまだ設立されてないじゃないか」

「そこに気づくとは……やはり天才か……」

よいしょをやめろ！普通気づくよ！

天王州さんは思案顔になって、口を引き結んだ。痺れをきらせたのか谷崎はワンオクターブ高く、声をあらげる。

「今なら副部長の地位を進呈するわ」

「……」

「え、永遠の安心感も……」

「……」

「うっ、っ、ぶ、部長も、考えようによっては譲る、けど？」

おずおず相手の様子を伺う谷崎。断るに決まってるのに、まったくもって惨め、

「いいよ」

「本当っ!？」

まさかの快諾っ!？

ど真ん中をホームランで返されたみたいにあっさりしている。

「君たちが僕の野暮用を手伝ってくれたらね」

とまあ、そんな甘い話があるわけないってか。

「交換条件ってわけね。いいわ。言ってみて。こう見えてもウチの郁次郎はクエストクリアが元来の趣味なの」

モンハンの話である。

「お言葉に甘えさせてもらうよ。僕はね、宇宙人に会いたいんだ」

聞き間違いか？

「え、宇宙人？」

「地球外生命体でもいい」

「いや、まて落ち着け」

人任せて突っ立っておこう考えていたのに、思わず声を出していた。

「何て言った、いま？」

震える声で、そう尋ねる。

「耳悪いわね郁次郎、天王州さんは宇宙人って」

「谷崎にはきいてねーのっ！」

少し黙っていてくれ。というかなんでこいつは平然と受け止めてるんだ！？

「エイリアンだよ、君。僕は宇宙人に会いたいんだ」

「いやいやいや、無理無理！いないって！」

「むう、仕方無いな、UFOでもいい」

「そういう話じゃねえ！」

この人電波や。サイコ！

「宇宙人？地球外生命体！？初対面で悪いけど、そんなもの見つかるわけじゃないですか！」

「やってみなければわからない。世界には無限大の可能性が溢れているとおもわないかね？」

「もし宇宙人がいたらNASAかJAXAがとっくに見つけてるって」

「陰謀論をここで論じる気かい？」

不敵な笑みで、俺のことを見返す。柔らかそうな頬にピンク色の唇、思わずギュッと抱き締めたくなったが、まだ捕まりたくないの
で、グッと我慢した。

「仮に宇宙に生命体が存在しないと仮定しよう。すると、どうだ？

我々は？我々は地球人である！広い宇宙をマクロ的に俯瞰したとき我々こそが宇宙人の存在証明なのだよ！」

な、なんだってー！という前に、

「あんたバカだろっ！」

思わず叫んでしまっていた。

「バカでけっこう！ドレイク方程式におけるレアアース仮説なんてくそ食らえだ！フェルミのパラドックスがあるだろう！」

「知らねーよ」

さっきからなに不思議な呪文唱えてるんだ？この人。

「文明進化は人類の衰退を意味するのだよ。高度な科学力をもつ異性人に頼らなくては、地球はこのままではダメになってしまうんだ！」

アイタタタ。右手で軽く額を押さえて、俺は静かに頭を抱えた。

僕っこはギリギリで許せたけど、真正電波は俺にはちょっと辛すぎた。

天王州愛流は俺の態度が気に入らないのか、微かに頬を膨らませた。

「君たちはいつもそうだ。僕がこの話をするといつも頭を抱える。訳がわからないよ」

「あ、いえ、ご高説痛み入りました」

できるだけ笑顔でそう告げて、背後の谷崎の肩に手をのせ、耳元で囁く。

「おい、わかってると思うけど、この人をメンバーに加えるのは」

「ええ……」

神妙な面持ちで彼女は顎を引いた。君子危うきに近寄らず、電波に関わるのは大変危険。さすがに谷崎にも分別というものを弁えて、「手伝うわ！宇宙人探し！」

「本当かい！？」

ああ、薄々感づいてたよ。谷崎も若干電波だって。

「ええ、ただ娯楽ら部の件も」

「ああ、ギブアンドテイク、君とは仲良く成れそうだね!」

あんぐり開けすぎた口が塞がらない、なに? なに? 俺がアウエイなの?

「たーにいざあきい!!」

イントネーションはナースのお仕事で朝倉を呼ぶときとの発音と同じである。

「宇宙人探してまじでいつてんのか!!」

「郁次郎だって、天王州さんの話を聞いて理解したでしょ?」

「は?」

「宇宙人は地球に来ている!」

「……ああ、まったく理解しないということを、理解したよ……」
もう、だめかもわかんね。

2..プラネットウェイプス(2)(前書き)

ふっかーっ！

おりゃー

2..プラネットウェイプス(2)

放課後の喧騒をシャットアウトするように後ろ手で扉を閉めた谷崎は、席についた俺と天王州に向かってにんまりと口角をあげた。

「本日の議題はいかにして未知との遭遇を成し遂げるか、であります！」

朝まで生テレビの着メロを流しながら、しれっと言う。

てーれ、てーれれれってー！

議論させてくれよ。まず宇宙人の存在を認めてしまっているところからやり直し要求させてくれ。

「僕は今日塾だから長居ができない。時間が惜しい、忌憚なき意見を交わし合おうじゃないか」

鼻息あらい谷崎の電波を程よく受信しているらしい天王州。その発言を潤滑油に、谷崎は元氣はつらつと声をあげた。

「それではまず、期待のニューカマー、天王州愛流ちゃんから意見をどうぞ」

「む、僕かい？」

「ええ、そうよ。新人だからって遠慮せずにビシバシいっちゃって！ただ私たちも容赦しないということだけはわかっておいてちょうだい。まあ、はじめのうちはあがっちゃってなかなか自分の心情を」
「そうだな。まず、宇宙人といっても、沢山の種類がいることをご理解いただきたい。いま判明しているだけでも、グレイ、オレンジ、ノプティリアン……、数えきれないほどだ。彼らは人類に友好的な種もいれば、それとは反対に敵愾心を持っている場合もあるという。いわゆる、インベーター、侵略者というやつだな」

「出せないとは、おもう、けど……」

「姿かたちも、フィクションでよくあるタコ型のものから、収斂進

化から我々人類にそっくりだという説もある。この中で娯楽ら部が比較的安全にコンタクトがとれるのが、やはり人型宇宙人であろう。そうなる次はどうやって彼らとコンタクトをとれば良いのか問題になってくると思う。チャネリングで解決するなら話が早いのだが、そう上手くはいかないだろう。だとしたら、我々から彼らに積極的にコンタクトをとるしかあるまい」

「……」

既にペースを奪われている谷崎部長（仮）。キノコの形したエイゴリアンたちはどこにカテゴライズされるのか知りたいところだ。

淀みなく続いていた天王州の演説は小休止に入っただけ。出されていたお茶を一口すすり、息ついた。ポットや湯飲み等は谷崎が持ってきた私物である。彼女は高校の部活動というものを全体的に勘違いしているらしい。

「宇宙人にコンタクトって、どうやってとるの？」

純粋な瞳で首を傾げる谷崎に、どことなく嬉しそうに天王州はニツコリと微笑んだ。

俺は、今晚の夕飯について考えを巡らせていた。

「良い質問だね。一番簡単なケーススタディとして宇宙人が人間に擬態しているパターンを思い浮かべてみよう」

エイリアンがいるとかいないとか、そういう次元の話はもう終わってしまっているらしい。

いること前提、しかも人間に擬態してるパターンだ。エックスファイルの世界を彼女は自分の価値観に当てはめているらしい。

「その場合、彼らは我々とは違う塩基配列をしているわけであり、いくら上手に擬態出来たとしても、ぎこちなさが残るはずなのだよ。君たちの周りにもいないかい？ どころなしに人間離れした非常識な人物が」

目の前に二人いるぜ！

「なるほどね。たしかに天王州さんの発言に一理あるかな」

顎に手を当てながら谷崎はぼそりと呟いた。

「そういえば、スゴく気になる生徒が一人いるのよ」

一瞬ドキリとしてしまう。ああ、気になる人とは。男の影が微塵も見えないから安心しきっていたが、谷崎は端から見たら充分整った顔立ちをしているのだ。そんな彼女が興味を抱く人物、幼なじみとして、捨て置くわけにはいかない。俺はなるたけクールな語調で、ぶっきらぼうに、「誰だよ」と尋ねた。

「ええ、名前はよく見るんだけど、顔は知らなくて」

「ほう、興味深いな。何て人だいな琴音、一回調べてみよう。この学校の生徒なんだろ」

「ええ、羽路高生のはずよ、たぶん見つからないと思うけど。前に気になって調べてたことがあって、その時はクラス名簿にも載って無かったんだもの」

半分怖い話みたいな状況に、若干違和感を覚えつつ、気になる点をいくつか質問してみた。

「名簿見て気になったんじゃないなら、ファーストコンタクトはどうやってとったんだよ」

「提出しなくちゃいけない書類でね、入学前はとくに願書とかいっぱいあるじゃない。そういうのに決まって書かれてるのよ」

「……ちなみに訊くが、その気になる名前って」

「羽路太郎っていうんだけど」

幼なじみの余りあるおバカ加減。呆れるより先に心配になってきた。

そりゃ、例題というか、学校側が載せてるモデルじゃばけ。

なにをどう間違えれば『羽路太郎』を實在の人物だと思うのか。

アホの子に成績では一回も勝ったことがないことに軽く絶望しつつ、勘違いを正そうと、声をあげようとしたとき、

「ふむ。確かに僕も気にはなっていた」

俺より先に天王州が、いたって真面目な顔つきで谷崎に同調しはじめたのだ。神様、もしかして、本当のバカは俺の方なのでしょう

か。

「でしょ！謎の人物よ、羽路太郎！一体何物なのかしら」

「調べてみる価値はあるな。ひょっとしたらひょっとするかもしれない。まさかこうも早く宇宙人の尻尾を掴むことができるなんて」
変な方向で話が纏まりそうになっていたので、「ごほっごほっ」と咳払いで自分の存在と、ここでは不在の一般常識についてアピールする。やっぱりどう考えても、アホの子はむこうさんだ。

「何よ郁次郎。喉の調子悪いの？」

「俺の喉は悪くないが、お前らの頭は悪いようだな」

「い、いきなり悪口とは失礼ね！」

「悪口じゃない事実だ」

「何が言いたいだよ」

せめて自分で気づいてほしくて、時間あげるよう俺は深いため息をついたが、彼女たちに閃きを与えることができなかったみたいだ。
「いいか、羽路太郎について今更とやかく言う気はないが、一つ忘れてることがあるだろ」

書類には必ず『記載例』と書かれているはずなのだ。それを思い出してさえくれれば、問題は解決したも同然だろう。

「忘れていること？」

谷崎は腕を組ながら隣で同じように首をひねる天王州に視線をやった。

「なにかあるかな」

「いや、僕はとくに思い付くものは」

「でも郁次郎が言うんだからよっぽどのよね」

よーしよしよし、良いぞ良い傾向だ。そのまま、それが提出用書類とは別に書かれていたものだということに気づくんだ。

「はっ、わかったぞ！」

天王州が閃いたようだ。

「琴音、我々は大切なことを忘れていた！」

「ええ！なに！？」

なんだかんだで天王州、地頭は悪くないんだから、さっさと谷崎の勘違いを、

「羽路花子の存在だ！」

「……」

えー。

「ああ、たしかに、思い返してみれば、彼女の名前もなんだかんだで、見てきた気がするわ！」

「うむ、謎の人物は一人じゃない、二人いたんだ！そうだろう、郁次郎！」

「ウンソウ、ヨクワカタネー」

「ははは、僕は昔ホームズに憧れていたことがあってね。推理は得意なんだ」

それなら棒読みから色々と察してほしい、この常時薬中の探偵かぶれが。

「そうになると、我々の目的のターゲットはこの二人に絞られたわけだ」

「ええ、冷静になって考えてみれば『太郎』や『花子』なんていかにも偽名っぽい名前だわ！」

そこに気づいてるんならもうすぐだろ！早く真実にたどり着けよ！

「ふむ。はたしてどこから探すべきか」

「絶対見つからないっての」

もう疲れたよ、気づけばぶつきらばうにそう告げていた。

「むう、どうしてだね、郁次郎」

頬をぷくりと膨らませる。平常時なら心が動かされる仕草だが、今は苛立ちを助長させるだけだ。

「そいつら（花子や太郎）は実在の人物じゃないんだ。言うまでもないことだが」

「なに？……いや、まて宇宙人が調査の際に使用している偽名だとするのはあくまで僕たちの推測に他ならない、なぜ、決めつけられ

る？」

「普通に考えりゃわかんדר。太郎とか花子とか今時そんな古風な珍しい名前、滅多にいないっつうの。つまりい、」

「君は郁次郎氏じゃないな！！」

「なんでそうなる！？」

もう驚愕すぎて顎がはずれちゃいそうだよ！人の話は最後まで聞こうよ！

「さては有害宇宙人、我々が正体に近づいていることをさとって、メンバーの一人である郁次郎に化けているのだな！」

「この倶楽部まだ発足してもいないから！そもそも方針固まったの昼休みじゃねーか！」

「なんて勘の鋭い宇宙人だ。原点回帰で考えてみれば『太郎』の次は『次郎』。羽路太郎にしてみたら、郁次郎は弟みたいなものだったんだよ！」

どこまで発展させるんだよ、この話。さすがにそろそろついていけなくなった俺は助けを求めるよう谷崎に視線をやった。この飛んだ電波少女に一言いってやれ、と目で訴えかけてみたけど、彼女の瞳は泳いでいるばかりで、力になってくれそうにない。

最低限、『俺は呆れてます』というジェスチャー、肩を軽くすくめながら首をふる、を行おうと息ごむ俺に降り注いだのは、

「そ、そうだったのね！」

幼なじみからの信じられない一言だった。

「え、ちよっ」

「なんだか今日はおかしいと思ったのよ！郁次郎にしてはなんか無口だったし！」

「啞然としてただけだよ！」

「黙りなさい偽者！幼なじみの私の目は誤魔化せないわよ！」

「やめて！たとえ冗談でも、けっこう傷つくから！」

「いつもの郁次郎はもっとイケメンなんだから！声だってあなたより洪いし、瞳はダイヤモンドだし、ボキヤブラリーもたくさんあっ

て知的で、白馬に乗った王子様みたいなんだから！」

「あ、へ」

自分の耳まで熱が上がる音を聞いたのは、これが初めてだった。普段こいつ俺をそんな風に見てたのか、とジョークとわかっていても赤面症になってしまう。

「や、やめろよー。なんか知らんがハードルあげんなよー」

デレデレと間延びした発言をしてしまった。

「ほら見なさい、郁次郎はそんなお間抜けな顔してないんだから！」

「って、いい加減このネタ引っ張るのやめろ！俺は本物の海野郁次郎だよ！」

「本物だったのなら証拠見せてみなさいよ」

「証拠だと？」

俺が俺である証明。身分証明書の提示をお願いされて、学生証でもいいのか尋ねたい気分だ。

「ええ、本物なら自分の秘密をここで暴露なさい！」

「意味わかんねえよ！」

「本物と偽者の区別をつけるのは簡単。本人しか知り得ない恥ずかしい情報をここで暴露すればいいだけだもの」

「あー、なるほどー、って、本人しか知らないならお前らだって知らないじゃん！」

「谷崎琴音を舐めないで頂きたいわね」

小学生のころよくやった、逆手双眼鏡で謎のアピールをする谷崎。完全に俺をからかってるよ。殺意とともに、ちょっとしたイタズラ心を覚える。

「そんなに言うんだったら、暴露してやるよ！俺の秘密をな！」

「おー」

パチパチと拍手するニヤニヤ顔の女生徒二人。今のうちに笑ってやがれ、特に谷崎！

「俺には辛くなったとき思い出す、心暖まる風景というものがあつてな」

「へー、なにそれ気になるわね」

「それは小さい頃、幼なじみと近所の公園でした『将来結婚しようね!』の約束……」

「ふえ! ええ! ?」

予想外なのだろう、プルプルと赤くなりながら震えだす谷崎。捏造された恥ずかしい記憶は思った以上の効果をもたらしているらしい。

「他にはそうだな、ファーストキスは幼なじみ」

「し、してないわよ!」

顔を真っ赤に即刻否定に入る。勿論していない。フィクションでよくあるシチュエーションだ、幼い頃交わした約束、てきなー。

「嘘よ嘘! やっぱりアンタ偽者じゃない!」

「まあ、嘘なんですけどね」

「ビックリさせないでよ! 私の初めて奪われてたのかと思ったわ」
「ッ」

変な発言はよしてほしい。心臓が跳ね上がったわ。いくら今の暴露が全部嘘だろうと、冷製になってみれば、気恥ずかしさだけが残った。

「でも、ま、そんな変人なところを鑑みるに、郁次郎で間違いなさそうだけど」

「そりゃどうも」

やったね! 俺が俺であるために、好きなことは好きと言える自分でよかったよ!

「のろけは終わったかね」

絵にかいたようなにやけ面で天王州は髪をかきあげながら言った。
「ノロケなんてよして!」

顔を真っ赤に全力で否定にかかる谷崎。なぜ、そこまで必死なのか、俺にはさっぱりわからない。うっうっ、なんか空しくなってきた。

「さて、盛り上がってるところ悪いが、僕はそろそろお暇させてもらうよ。塾があるのでね」

「あ、ええ」

天王州はニヤニヤ顔のまま、鞆を手に出口に向かった。

「そうだ、一つ提案があるんだ」

立ち止まって振りかえる。

「今晚9時、校門前集まらないかい」

「え、なんで」

「宇宙人を探しに行くんだ」

「さんっせいー!」

俺アルカリ性（反対）!

「いやいやまてまて、勝手に決めるな!」

「む、郁次郎は来れないのかい」

お前たちの突拍子のなさにはついて行けないけどな。

「落ち着いて考えてみる、夜遊びはよくない!それに、そう!うち超厳しいしいー」

「抜け出せばいいだろう。僕は星を見に行くときいつもこっそり抜け出してるぞ」

アクティブなお嬢様だなおい。

「郁次郎家の規則そんなに厳しくないじゃない。ねっ、いきましようよ」

猫なで声の幼なじみは無視するとして、抜け出すとか、やってできないことはないだろうけど。ぶっちゃけうちは激ユルだし。素直に言っても許可貰えそうだ。

「んじゃ、そういうことで」

人の話を最後まで聞かず天王州は日暮れの廊下に消えてしまった。

「俺らも帰るか」

用もなくなっただし、これ以上ここにいるのは時間の浪費、青春の無駄遣いだ。

「そ、そうね」

未だに頬を赤らめたままの谷崎。照れてるのかと思ったが、なんだか様子がぎこちない。風邪でもひいてるのだろうか。

「おい、大丈夫か？」

「え、なにが」

「顔赤いから」

「あ、うえー、だ、だいじょーばない」

「……どっち？」

なにその新しい日本語。

「でも、お、驚いたわ、郁次郎、覚えてたのね……」

うつむきがちに謎の発言をされる。なんのこっちゃ。首を捻って考えてみても答えが浮かばなかった。

「なんの話だ？」

「な、なんでもないわよっ！か、帰りましょ！」

「ああ、うん。……右手と右足同時に出てるぞ」

歩き方まで、変になっちゃった。

つか、9時かあー、夜まで天王州と谷崎の珍道中に付き合うの

は、精神的に辛いもんがあるよなー。

いっこつかやめよつか、考え中ー。

どうせ宇宙人になんて会えっこないし、無駄なことはやらないに
ほうがいいよな。それこそ、青春の浪費だ。

3..プラネットウェイプス(3) (前書き)

なんか早くも気分的に追いやられています。くあー。

3..プラネットウェイプス(3)

夜空に煌めく幾千の星ぼし、肌を撫でる新緑の風。

願いが叶うなら今すぐ家にかえって、ゴロゴロしながら漫画読みたい。

「早いわね、郁次郎、なんだかんだで、一番乗りじゃない」

ジャージに身を包んだ谷崎が、校門に寄りかかる俺に手をあげた。時計をみれば丁度9時、待ち合わせのジャストタイムだ。

「おめーが遅いんだよ。五分前行動くらい常識だろうが」

「私ルロイ修道師をリスペクトしてるから」

しれっと訳のわからないことを言う彼女に携帯をたたみポケットいれてから、ため息を一つプレゼントしてあげる。

街灯をテカテカと反射する我らが母校の体操服、花の女子高生から仄かに汗の臭いが漂ってくる気がした。

「お前良い歳なんだから、いい加減格好くらい気を使えよ」

ファッションセンスについてとやかく言うつもりはないが、物事には限度がある。君今年16歳でしょ！

「これは外出用のジャージですう。まじおしやれでえすう。動きやすいし、最高なんですう」

唇を尖らせて頬を膨らませる谷崎をオレンジ色の光りが照らしていた。

「知らなかった。素早さを優先すると、かっこよさのステータスが減少すんだな」

「見てくれより、大切なのは、ここ！」

心臓を親指で指差す。「ソウルよっ！」校章が輝いていた。

「中学時代のだろ。校章とエメラルドグリーンが目には痛いんだけど」

「……るさいわね。文句あるの」

筆舌にしがたいほどある。半袖半ズボンでも違和感のない気温、ここはぜひとも体操服の着用をお願いしたい、ブルマなら申し分ないだ。

なんでアレを廃絶っすかなあ文科省ー！

ギリギリラインによる健全なる性の目覚めを妨げるクソツタレ。今だからこそ、あの美しきV字に敬意を評し、そして声を大にして叫ぶのだ、ブルマは男のロマンだっ！

取り繕ったクールキャラの崩壊をおそれ、声に出すことはしなかったけど。

「それにしても愛流遅いわね」

左手に留められた腕時計に目を落とし谷崎は呟いた。

そもそもこんな時間に呼び出したのは天王州愛流だ。その本人が遅れるとは何事だろう。

部室での不毛な会話を思い出す。

「今夜9時、校門に集まろう」

美少女からの夜遊びのお誘い、本来なら両手を上げ感涙しながら、頭を垂れるべきなのだろう、

「宇宙人を探すんだ」

糞みたいな名目がなければ。

回想の終わりは校門前に止まった黒塗りの高級車によって遮断された。静かな排気音を響かせ目の前にこれ見よがしに停車する。運転席からスーツ姿の若い男が出てきて慇懃に歩道側の後ろドアを開けると、中から出てきたのは天王州愛流に他なら無かった。

「今晚は、郁次郎に琴音。良い夜だね」

遅れた言い訳もせずに、地面に降り立つと、後ろで控える運転手に、

「ご苦労様。時間になったら迎えに来てくれ」と、命令した。

「はっ」

忍者みたいな返事を残し男と高級車は、静かな排気音を轟かせ夜の闇に溶けていく。非日常的光景にあんぐり口を開ける一般人約二名を置き去りに、フリフリのコスロリチックな服装に身を包む天王州愛流は「遅れてすまないね」と小さくお辞儀をした。俺の回りに、まともなファッションセンスの人間はいないのか。

いや、個人の趣味に口を出すほど、自分のセンスに自信があるわけではないが、少なくとも、たすき掛けに虫かごをぶら下げ、手には虫取網を持つ、彼女のセンスを手放しに認めるほど豪碌しているわけではない。腕には謎の厳つい腕輪をはめて、ピーコじゃなくても、「チェックするわよ、覚悟なさい、イケテないわね、全然だめっ！顔洗ってらっしゃい！」と叫びたくなるほどだ。

「さあ、宇宙人に会って懇談会を開くんだ。今夜はいそがしいぞ」と意気込む天王州に、その手に持った虫取網どっからどう見ても捕まえる気満々だよね、と突っ込む気も起こらなかった。

サマーキャンプに臨む小学生みたいな格好で言われても、宇宙人はカブトムシじゃないと懇切丁寧に伝えるのがおれの限界だよ。

「ええ、頑張りましょう！愛流」

気さくに名前で呼んだ谷崎は、俺にしたように彼女の肩をポンポンと叩いた。

「でも、遅かったわね。事故にあったじゃないかって心配してたのよ」

「すまない。こっそり抜け出すのに骨が折れたんだ」

「いやいや、こっそり抜け出せてないよ！お抱えの運転手と一緒に説得力ないよ」

我慢の限界が澄んだ空気を震わせた。

しかも、さっきの人とは別の人だとは思うが、スーツ姿のガードマンみたいな男が電柱の影からこっちをじっとみてるし！しかもあの人、夜なのにサングラスつけてるよ！

「……はっ!？」

気づいてなかったのかよ！もしかしたら口かたい専属運転手かなにかかと期待した俺がバカだったよ！

親バカなのか知らないけど、黒スーツがこっちをじっと眺めてるよ！仲間にしたくないから、突っ込まないけど！

「冷静に考えてみれば確かにその通りだ。やられたな」

あのバレバレの黒スーツに気づいてない時点で、お前の洞察力はゼロだけだな。

「色々と間違ってるから。まず、その虫取網でなにをするつもりか言ってみろ」

「勘違いしないでくれ。ファーストコンタクトを取るために必要な武器なんだ。恐らく僕のこの姿を見て逃げるやつは宇宙人に違いなからな」

「どんなやつでも、お前と夜道でエンカウトしたら逃げるよ！」

「ならば僕は一意専心、宇宙人確保に乗り出すだけだ、てやつ」

見てるもののやる気をそぐ下手くそな素振り、それを抜きにしても、

「そんなちっさな網じゃむりだっつーの！」

「……ネギ星人（子）くらいならなんとか」

「あきらめろ！」

校門前でうだうだ手ごまねいている、俺と天王州に、谷崎は分かりやすいくらいはつきりとしたため息をついた。

「もういいから行きましようよ」

「行くってどこにだよ」

「それは、その、宇宙人を確保しに」

「だから宇宙人はどこにいるのか俺は聞いているんです」

「だから、ね、それは、……私たちの心のなか、かな」

「うわーお、お前のインナースペース、部員や宇宙人で溢れてんな」
先日も似たようなことおっしやってたよね。

「あそこに山があるだろ」

ふと天王州は平坦な声音で遠く広がる丘陵を指差した。山なんておこがましい標高だ。

「前々から怪しいと睨んでいたのだよ。町を一望出来るあそこなら、きつと宇宙人の集会所になっているに違いないとな」

憶測と決めつけが入り交じる素敵な提案で俺たちの目的地は決まってしまったみたいだ。

五月とはいえまだ肌寒い時分だ。さっきはブルマ熱から暑くなっていたか、静けさを伴った夜の帳は、俺たちを包み込むと同時に空しい感傷を植え付けていた。煌々と街灯に照らされた黒ずんだ道路の上、繰り返す作業のように歩みを坦々と進ませる。

黒スーツにつけられてるけど、突っ込んだら負けだよな。

背後には花も恥じろう女子高生の頭の悪い会話が繰り返り広げられていた。

「机9文字事件ってしってるかい？」

会話のキャッチボールを無視した天王州の発言であった。

「うーん、聞いたことないわ」

「僕たちが産まれる随分前、たしか1988年だったかな。世田谷で発生した事件でね、深夜に複数人が学校に忍び込み、校庭に机を並べてアラビア数字の9を描いたのだよ」

「な、なあにそれ！」

背後で目を輝かせる谷崎を容易に想像しつつ、俺も天王州の話に興味をそそられていた。

校庭に机で文字を描く、言うは易し行うは難しだ。つうかなんでそんなことやったんだ。

「使われた机、椅子は450にもならび、それらが狂いもなく9という一つの文字を構成していたんだ。深夜暗い中、目印もなしに、だよ」

「す、スゲーな、それ」

「当然世間を騒がせてね。犯人グループの目的やらをメディアは面

白おかしく推理してみせた。そのなかには当時流行っていたミステリーサークルと結びあわせ、宇宙人に対するメッセージなんて説もあった。世にも奇妙な物語では題材にもなってたな」

「……」

なんか話の奥が見えてきた。彼女がなんで突然こんな話をしたのかも。

「僕はね、娯楽ら部を通じて、この事件を越えるなにかでっかいことを起こしたいんだ！」

その選手宣誓は夜道を明るくするようなハキハキとした声音で行われた。おぼかな谷崎が同調する前に俺は割り込むように「そんでよっ！」なんとか声をあげる。

「結局犯人たちの目的って結局なんだったんだ？」

捕まってない、とかなら真相は闇のなかなのだろうけど、天王州が優に続きの言葉をはいていることから事情を察することができる。

「それがまた傑作なのだが、なにもなかったのだよ。ただの暴走族が母校に自分の一番好きな数字を作っただけなのだ。イタズラ好きでオチャメだろ」

「逮捕されたんだろ？ 罪に問われたんか？」

気さくな質問なのだが、天王州の言葉は分かりやすいくらいに詰まった。

「……実行の際、用務員を監禁していてね。加えて不法侵入で主犯の二名は懲役刑を受けている。しかしながら机で9文字綴ったことに関して、なんの罪に問われていないのだよ」

「そりゃ、やっちゃいけないことだな。犯罪になるんだったら」

よって前科者になりたくない郁次郎くんはお断りなのですよ。

「ち、違うぞ。あくまで僕はこれを参考に、でっかいことがやりたいのだ。例えばだが、郁次郎に琴音、君たち部室にあった机を一階の学習準備室に運んだと聞いたが何分くらいかった？」

首を捻って回想を始めようとした俺より先に谷崎はなんてこともないように呟いた。

「たしか一時間半くらいね。二人だったからえらい時間がかかったわ」

「ふむ。階段があるにしてはなかなかのタイムだ。全部で何脚くらい運んだんだい？」

「さあ、40くらいかしら」

「ふむふむ。それで一階の学習準備室にはどれくらいの机が集まったのかわかるかい」

「たぶんだけど前からある分をあわせて70脚くらいかしら。上にも重ねてあるし」

正直あのくたびれた記憶は呼び起こしたくない。椅子や机の足の一部が夕日に照らされ外国人墓地みたいになっていた。

「70脚か、それだけあれば校庭に文字を書くのは容易いな。しかも一階の学習準備室はちょうど校庭に面している。1つ運ぶのに3分としてそれを三人で割るから70分、可能だな」

「わけのわからん計算すんな！やらないからな！」

机9文字は参考程度ってさっき言ったばっかだろ！

山を目指して歩いているわけだが、思ったよりも遠く、加えて寒く、ついでに眠く、まあ、なんというか、グダグタになっていった。主に俺が。あんまり遅くなると電車だから、帰りだるいし、まず何より宇宙人なんて漠然とした不確かなもののために苦労しているとみると、こう、ムカツ腹立ってくるよね。

「帰ろうぜ」

気づいたら、禁止ワードと化していた五文字を呟いてしまった。

「むっ、なんでだい！？」

「郁次郎頭おかしいんじゃない！？まだなにも成し遂げてないわよ！」

おかしいのはお前らとこの世界を構築する空気だ。

「はつきり言わせてもらうけど、俺は無駄なこととはしない主義なん

だ。百万歩譲って宇宙人が地球に来ていとうしよう。そいつらと出会える確率はどれくらいだよ」

たーらーら、たららららら、たらーら、ゼロー♪

ハミングでバカにしてやった。

「……ゼロではない」

「四捨五入すりゃゼロだろ！ UFOに会いたいなら即刻コンビニ行つて来い！ お湯なら提供するから！」

「なんのはなしだい」

気のきいた庶民ジョークは受け入れてくれなかったみたいだ。

夜空に浮かぶまん丸お月様、お月見とか天体観測ならやるきも沸いてくるもんだが、宇宙人探しなんて……虚しすぎる。

「帰る」

宣言してから、俺は駅に向かって踵を返した。

「ちよつと、ここまで来てそれはないんじゃない」

袖口を谷崎に捕まれ、よろけてしまう。ええい離せ。

邪魔くさいやろーだ。

「もー、めんどくさいー、二人でやっつけよー」

「これはあくまで倶楽部活動なのよ」

「だから、俺は正規メンバーじゃないっての」

何回言えはわかるんだよ。

「ほら、いいから郁次郎」

グイグイ引っ張られる。袖が延び、靴底がすり減る。

「山はすぐそこよー」

「あれ意外と遠いぞ！」

「ちかいちかい！」

「それに、ほら！ こんな時間に男子と一緒にじゃ、お前らもなにかと、ねえ」

「郁次郎なんて両生類みたいやもんだから、大丈夫よ！」

「バカにしてんのかよ！」

「してないしてない、男という気がしないだけだから」

「気のせいだよ！」

切に願いたい。

「お前はまだしも、天王州は心配されてるっての！」

プレート争奪のハンター試験のときみたく、黒スーツサングラス男にずっとつけられてるし。

「む、なんでだい？」

「あそこにお前の従者が、」

黒スーツが隠れる電柱を指差した瞬間、男は後ろを向いて駆け出した。尾行は秘密りに行われていたらしい。当たり前だが。

「……とまあ、心配をかけるのはよくない」

小さくなっていく背中を見送りながら呟く。お仕事の邪魔をしてしまったらしい。

「な、なんだとッ、あ、あれは」

天王州はわなわなと唇を震わせ、仕事放棄した自分ちの雇われ人の背中に目をやっていた。

あんなバレバレの尾行気づかないのは、天王州くらい、

「だ、誰よあれっ！」

……と谷崎くらいのもんだ。

モロバレレベルでついてきてたのになあ。

「あれはッ！くっ、間違いないッ！」

「ええ、私たちをみて逃げ出す、あの黒スーツ！気を付けてッ！攻撃は始まっているわっ！」

「攻撃？」

「新手のスタンド攻撃よッ！」

口でド　ド　ド……と効果音つけて雰囲気を出そうとする谷崎^ホ。

「いや、そういうのいいから」

「あ、ごめん」

天王州に冗談を諷められて落ち込む谷崎^{アホ}。

「と、とにかく、あの男、間違いない、メンインブラックだっ！」

昔そんな映画あったよね。

「なにそれ。聞いたことある気がするわ」

「知らないのかい琴音。メンインブラックとは宇宙人について知りすぎた研究家たちに警告を行う謎の組織のことなのだよ！」

「え！？」

はい、ばかー。

「ああ、確信をもって言える。黒スーツにサングラス、やつらのトレードマークだ」

コナンに薬飲ませた人みたいだね。

「え、嘘っ！愛流ちゃんちのボディガードかなんかじゃないの！？クレヨンしんちゃんの黒磯みたいな」

「……」

途端に無言になった天王州の紅潮する顔を谷崎はそっと除きこんだ。

「ど、どうしたの」

「……すまない。僕んちの執事だったよ」

乾いた笑いだけが、下らない虚勢を支えていた。

「なんで、執事が逃走中のハンターみたいな格好すんだよ」

「僕がその方がかっこいいからとお願いしたんだった」

「……」

「……」

「さよならー」

笑顔で手を降る。アディオス。

早くかえって漫画読みながらゴロゴロしたい。

4 ロールプレイングゲームセット（前書き）

プロットなしで、漠然と書きたいことを書いてみる。

あこのころの懐かしの感情がよみがえります。

このグダグダ感たまらないなー。

4 ロールプレイングゲームセット

今日も今日とて退屈をもて余した俺は、意味も用も必要もないけど部屋に向かう。

かなしきかな、娯楽ラブはまだ同好会扱いなので、なかにいるのは部員ではなく、暇人×3。放課後自主的に居残って不毛な活動にせいをだす、……。先生に怒られてないのが奇跡に近い。

「今日はね、二人の役職を決めようと思うの！」

明朗快活とした笑顔を振り撒いて、谷崎は俺たちの方をむく。

「ほう」と天王州は興味深げに細目になった。

塾がないので、フル出場できるぞ！と意気込んでいた彼女に申しわけないが、どうせ今日もグダグタになるだけだと、思っていた俺を良い意味で裏切るはじめての有意義な意見。

感動で震えがおこりそうになる。

「そうだな。とりあえず三人でやってくんだから、それくらいは優先的に決定してもいいさな」

「へへっ、それじゃ郁次郎は土属性の武道家ね！」

「……？」

ホワイ？

一瞬の思考停止。

「なに、なんの話？」

部活における部長、副部長、書記、会計などをきめんじやないのか？

「え？だから、二人の役職をね。郁次郎は土属性の能力者」

「いや、ちょっとまって、一から十まで意味わからん。なんでそんな話に？」

「え、だって郁次郎、土っぽいし」

「はあ！？どこがだよ！」

「うーん、強いて言えば、匂いとか」

「……」

無邪気に傷つけられた、気がする。

「愛流は水ね！賢者よ」

「よからう」

えー、二人の間では問題なくこの会話が成り立つのおっ！？

「そして私、谷崎琴音は炎属性！勇者！以上！」

「すとおーっぷ！」

瞼を仄かに重くするわずかばかりの睡眠欲は自身の叫びに吹き飛ばされた。

爽やかな季節、輝く風が新緑まぶしい木々を揺らし、耳心地のよい音をたてている。窓からは傾いた太陽光が射し込み室内を無駄に明るくしていた。床の反射で下からライトアップされてるみたいになった谷崎は気持ちのよい笑顔でクビを捻る。

「なんで？」

「一から十まで理解できません！俺がバカだからですかっ！？」

カツカツと足音をたてて彼女に近づき、その華奢な肩をがっしりとつかむ。

「なに？属性って！？カムバック谷崎、現実世界戻ってこい！」

「属性は属性よ。郁次郎、世界を救いたくないの？」

「だから、お前はなにを、いつてるんだ！？」

「ちなみに私は十数回世界を救ってきた経験の持ち主よ（ゲームのはなし）。私がいかなないと世界がヤバイんだもん、仕方ないよね。ま、それはさておき下準備はすんだし、そろそろ本番に移ってもいいかなと思うわけ」

しれっと言いつつ彼女に、このときの俺は世界で一番間抜けな表情をしていたことだろう。

「それで、属性ね。性格やイメージでその人のタイプを分析するのは。炎属性は熱血漢な主人公、水属性はクールキャラ！」

「うむ。クールキャラである僕のイメージに水属性はピッタリだ」
天王州の落ち着きは物腰だけだって、短い付き合いだけど俺は理解したよ。

「土属性は……、あれ？」

「土……微妙に特徴がないな」

「郁次郎にはピッタリなんだけど、土属性のテンプレートが思い浮かばないわね」

「土属性のテンプレか。うむう、一言で言うならダサイね。影が薄いし足が遅そうだ。やつは四天王のなかでも最弱……そんなイメージがわくな。いやまあ、忍耐力はありそうだが、それだけのような気がするよ」

「わかるわかる。頭悪そうだし、飛行キャラには無効みたいな風潮があるわね。一番最初にしにそー、冷遇されてるわ。ただまあ我慢つよそうよね！」

ひたすら耐えるのが得意の俺でも我慢の限界が近づいていた。

なんでこの二人は天使のような悪魔の笑顔で俺の心をズタボロにするんだろう……。全世界の土属性キャラを敵にしたな！……、……特に誰かっていうのは思い浮かばなかったけど。

「まあ、とりあえず郁次郎は土属性、決定ー」

「意義ありッ！」

人差し指を突き立て、喉が張り裂けんばかりに叫んだ。

その声にびっくりしたのか二人は目を丸くして俺を見た。

「なんもねえーなら無属性でいいじゃねーか！無理矢理カテゴライズすんのやめろよ！」

「無属性なんて属性はないの！」

谷崎はバンと机を叩いて立ち上がった。おっ、なんだやる気か、このやろー。

「私は四大属性か五行説以外の属性を認めない！」

なんでそこで食いつくんだよ！

「だったらもっとましなのあるだろ！」

「そうね、あとは金属性とか」

「なんかぜってーやだそれ！」

シックスは好きだけど、良いイメージは持てない……。

「むーそれなら仕方ないわね……。名前のイメージで決めようかしら。海野、郁次郎ねえ。海だから水かな」

「僕とかぶってしまっじゃないかあ」

ぷんすかと声をあげたのは天王州である。

「んじゃ、愛流ちゃんの名前のイメージから……。天王州愛流、州、流れる、やっぱり水ね」

「うむ、譲れないよ！水属性だけは」

なんでそこで水に意固地になるのか私にはわかりません。

「まあ、別にパーティーに水が二人いようと問題ないよね」

「なあにいつてるんだい琴音！二人ではキャラが、アイデンティティーがかぶってしまうじゃないか！」

「ああー」

納得言ったような声を上げる谷崎に脚注を加えるのなら、あくまで妄想の話という点だ。

「ばかじゃないのー。」

額に軽く手をやる俺に気づいていないのか、彼女は手をポンとあてて、一転明るい声をあげた。

「それじゃ愛流ちゃんも回復系の水属性！郁次郎は攻撃系の水属性ってことでどう？これならキャラの差別化が保たれるわ」

「むー、しかしだね、君。僕はこうー」

天王州は不思議なおどりを踊った。俺のMPが大量にすわれた！

「かっこよく詠唱して敵をドバーって倒したいのだよ」

「回復役は女の子じゃなきゃだめよ。ほら、なんだかんだで一番耳につく詠唱って回復呪文じゃない、パーティーから絶対にはずせないキャラになれるし、ラスボス戦でもレギュラー確定よ」

怒濤の説得ラッシュにふんぞりかえっていた天王州はやがてその重たい腰をあげ、

「……よからう。その条件、のむよ」

「さすがよ！」

グッと握手する女の子たち。ベンチャー企業が大会社と契約を果たしたみたいな光景だ。

ただまあ間違いないと言えるのは、ラスボス戦で、俺は間違いなくサブメンバー、ということだけである。

「そんなことよりさあ、一つ言いたいことがあるんだけど」

黙って聞いてりや寝言みたいなこと言いやがって、辛抱たまらなくなつた俺の攻撃。

「谷崎は絶対炎属性じゃないよね」

「ふにゃ!？」

へんの雄叫びで誤魔化されることはない。

「少なくともてめえは熱血キャラじゃないだろ。それに名前の谷崎琴音にや火を表す漢字が一文字も入ってないじゃないか」

「ちっちゃいわね!別に良いじゃない」

「いんや、譲れないね。人を勝手に土……いや水か、水属性にしといて自分は免れようだなんて卑怯じゃないか」

「別に、そんなこと考えてないけど……」

「だからお前の属性は第三者たる、俺と天王州で考える。意義ないな」

「ふーんだ、いいもーんだ」

イーと歯を見せる彼女を無視し、天王州とこそそと囁きあう。

「というわけで谷崎の属性」

「君も些か要領をえないね」

ニタニタと薄気味悪い笑顔を天王州は振り撒いた。

「うるせーな。いいからほれ」

冷静になって考えてみると、いい歳してなにやってんだろいうな、おれ。

まあ、気にしたら負け、だよな。

「ふむ。琴音の能力ねえ」

「っ」

「む、どうした？」

「いや別に」

いや、なんかこう胸のしたの辺りが、痛いよね。黒歴史生産中みたいだね。

「音属性かな。名前にもイメージにピッタリだと僕はおもうんだが」
「本人、そういうイレギュラーな属性は認めないって言ってたぞ」

「ああそういえばそうだな。そうなる……」

頭もひねってみてもいい案は浮かばず、どれもしっくり来ない。

しびれを切らした谷崎がブウブウ文句を垂れ始めたので、とりあえず呟いていた。

「風属性なんてどうだろうか」

「風？そりゃまたけつたいな。ちなみに訊くがどうしてだい？」

「うーん、飄々としていて、掴み所のないところとか」

理由なんて思い付かないので、適当にぶっこいたら天王州は「なるほど」と得心言ったように頷いている。まじで納得したのかよ、と突っ込もうとした瞬間彼女は谷崎の方を振り向いて「決まったよ、琴音」と朗らかに笑いかけていた。

「えっ、ほんとに？なにになに？」

「郁次郎の一存でね、君は」

「あー、待って、いま覚悟固めるから！」

すーはーすーはーと深呼吸を繰り返し、気持ちを落ち着けたらしい谷崎は「いいわよ」と合格発表を待ちわびる受験生のように瞳を光らせている。そんなだいそれたもんじゃないだろ。それに応えるように天王州も神妙な面持ちになって、ダーマ神殿の神官みたにいい放った。

「谷崎琴音、君は風属性だ」

「風！？」

一度だけ戸惑ったような声をあげたあと「風ねー、うーん、悪く

ないかも」とひとり納得してくれたようなので、よかった。

「ちなみになんで風なの？」

「郁次郎が言っていたんだがね」

天王州がチェシャ猫みたいなにやにや笑いを浮かべたとき、嫌な予感が全身を支配した。

「ああ、琴音、君はまるで風のようなだ！ある時は優しく包みこむように、時に激しく僕の心を惑わせる」

ぶっ、文字通り吹き出した。

「え？え？」

「ねがわくば僕は羽になりたい。風をとらえる翼がほしい。b y I K U J I R O」

「えー」

言葉が紡げなかった。顔を赤くしくねくねと照れたように笑う谷崎に遠慮したからじゃない、ただ単純に脳がフリーズしたからだ。

こいつ、なにいつてやがんだ！？

「でも、風はひとりのものになるわけにはいかないからなあー」

耳まで赤くし、宣う谷崎。なんか知らんがふられたらしい、ぶっとぼすぞ！

「さあ、き、気持ち切り替えて」

めんどくさいから訂正しなかったけど、谷崎はインフルエンザにかかったみたいに頬を紅潮させている。

「つ、次はみんなの武器をきめましょ」

普段の5割ましで吃りが激しくなってるし、めんどくせえ。

手をパンパンと叩いて気持ちを切り替えるよう促している谷崎が一番切り替えられていない。ちらちらこっち見てきてるし、うぜえ。

「ふむ。なかなか興味深いな。ちなみに琴音はなんの武器を選ぶんだい？」

え、そんなナチュラルに繰り広げられる会話なのそれ。

「むふふ、私はねー。やっぱ主役だからあれかなー」

まあ、突っ込むまい。お前の脳内劇場では常にお前は主役だろうよ。

鼻をならして聞き流す俺の横で天王州が不機嫌そうに呟いた。

「む、主役は僕だろ！ 琴音、聞き捨てならないよ」

「えー、だってRPGの主人公っていったら、ほら私のようにカッコク華麗で……」

「僕だってカッコクテ華麗だぞ！」

ガタツと椅子をならして立ち上がり、天王州は大きな声をあげた。
「みたまえ、このナイスバディをつ！」

胸を強調させるようにふんぞり返る。

やめろ、男子が一人いるんだぞ！

「ば、バディは関係ないじゃん！ 大切なのは心よ、ハート！」
「ふふん」

焦る谷崎に勝ち誇る天王州。

やべえ、横で見ててちよつと楽しくなってきた。

「でも、あ、愛流。ちっちゃいよね」

「む？ なにをいう。このナイスばー」

「胸の大きさの話じゃないもん！」

顔を真っ赤にどなる谷崎。久しぶりにお前のことがかわいいと思えたよ。

にやにやが止まらない俺は、下唇をギュツと噛んでうつむいた。

「身長よ！ 身長！」

ピョンピョンと跳び跳ねて自分をアピールする谷崎。君もいうほど身長高くないけどね。

とはいえその指摘は天王州に明確なダメージを与えたらしい。「ぐうつ」と言葉を失ってから唇を尖らせた。

天王州は確かに身長がひくい。ストレートにいうならチビだ。栄養が胸にいったからだろうか。

「む、胸にはなあ、夢が、夢がつまってるんだぞ！」

天王州さんに10万点。その考えはおおむね正しい。

「なあ、郁次郎！」

「ふべっ!？」

いきなり話をふるなっ!

「あ、いや、ま、えー俺はだね」

がんばれ俺、保てクールキャラ!

鼻水が溢れそうになる。

「え、郁次郎もおっきい方がいいの？」

顔を青くし、わなわなと呟く谷崎に、「もちろん」と答えてやるほど俺の度量は広くなかった。

無言のままあたふたとする俺にしびれを切らせたのか彼女は大きな声で、

「いいもん! 郁次郎の使用武器トンファー!」

わけのわからない決定が下された。

トンファーなめんな! 盾の紋章とセットで最強なんだぞ!

5..ウエストエンドガールズ(前書き)

超長くなったんで、きりがいいところ分けようかとおもったんですが、キリがいいところがなかったんでそのまま投稿します。どうしてこうなった。

5..ウェストエンドガールズ

俺たちのクラスはB棟の、遠い場所にある階段の掃除を担当している。それでもって今週の当番は谷崎の班だった。

事情を知らない天王州を待たすわけにいけないので、一足先に部屋に行き、預かっている鍵を穴にさした時だった。

「君、娯楽ら部の部員？」

後ろから声をかけられた。

振り向いてみると、壁にもたれてこちらを眺める長身のメガネ男が立っていた。軽く髪を立たせて、端正な顔立ちを際立たせている。イケメンをみると無条件に湧いてくる怒りを押さえながら、至って平穩に声をだす。

「なんです？」

「ここは娯楽ら部の部室で間違いない？」

「ええ、らしいですよ」

「らしい、とは……」

「俺は正確には部員じゃないので」

「なるほど、そうか」

女ならキュンとくるような微笑みをたたえるが、残念、俺は男だ、ばーか、しね！

「それで、なんか用でも？」

「ん？君は部員ではないんだろう？」

「はあ、まあ、部員じゃないけど、お手伝いみたいなことをしてまして」

「なかなか複雑だな。んじゃ君でもいいかな」

ふと、この男が尋ねてきた理由の予想がぶわっ、と浮かんできた。まさか、こいつ、入部希望者！？信じられん！

やったな、谷崎、お前の密やかなる活動がついに身を結びー

「生徒会の投書に娯楽ら部なる学徒集団が学習室を不法占拠してい

ると連絡があり、ちょっと警告しにきたんだが」

「……」

風呂上がりの火照った体に冷や水を思いつきりぶっかけられたような心持ちになる。

「……とりあえず、中で話でもしましょう」

ドアを開けて生徒会からの使いを中に招き入れた。

空気は静寂の色に染められていた。ああ、気まずい。掃除をしたとはいえ、室内のホコリ臭さは簡単にはとれていなかった。

お茶をいれて、生徒会からの使いの人にそっと差し出せば、「あまり感心しないな」と真顔で諫められた。言われて気づく、このポットとお茶は谷崎の私物だ。

「これは、ほらー、あの、あれっす。前の部員の、えー、備品？備品があつて、ですねぇ」

「そういうことなら仕方ないな」

一口すすり、小さく息をつかれた。んならいいけど。

さて、あらためて目の前の男を観察してみる。

羽路高校は学年別でネクタイが色分けされているので一目瞭然でその所属学年がわかるようになっていた。目の前のメガネ男子は青色、つまり一年生というわけだ。同学年ちいす、とぼんやり考えていた俺の思考に割り込むみたいに男は静かに言葉滑り込ませた。

「単刀直入に言う。いくつかの部活から意見をいただいた。いわゆる娯楽ら部なる同好会未満が部室を獲得しているのはおかしいのではないか。不公平だ、と」

「あー」

たしかに冷静になって考えてみれば、部室すら貰えていない部活はざらにある。部活にもなっていない娯楽ら部が部屋の中でだらだらするなんて百年早い。孫悟空を調子に乗って天界で大暴れするくらい早い。

「でも先生から許可はもらってるハズですよ」

「ん？ そんな報告は受け取ってないが……」

「え、嘘！？」

前の部活顧問の先生にお願いしたら二つ返事でオッケーもらえたって谷崎がいったハズだ。実際にその場にいたわけじゃないから、わからないけど。

「顧問として山本先生にお願いして……」

「あー、山本先生」

生徒会の人はいささか哀れむような視線を俺にあたえ、メガネのツルをくいとあげて位置を直した。

「申し訳ないが、その申請をそのまま受領することは出来ない。山本先生にもう一度お伺いをたてて、申請をやり直してください。老婆心ながらアドバイスさせてもらうが、今度はきちんと最後まで先生の動向を見守っていた方がいいと思うぞ」

「はあ」

忘れてやがったな山本ティーチャー。おまけに常習犯かよ。

「それでは今日はこれで失礼する」

さりげにこの人いいやつなんじゃないか。

と機械人形のように頷く俺に男は「お茶、ごちそうさま」と礼をいってから立ち上がった。

「言い忘れてたが、いまの時期に新設された部活は当面の間部費が支給されませんので注意してください」

「あ、いえ、部費なんてそんなおこがましい」

大それた活動してないので無問題です。

「それからわかってると思うが、新設には五人以上必要だからな」

「ああ、はい。いま奔走中です」

「最後に、メンバーが揃っていても、学校側が認める活動内容がなければ部として容認されないので注意」

詰んだ。

「それからここが特に重要だが、悪いが部室はおいそれと与えるこ

とができません。ここは物置として再利用させてもらう」

「えーと、つまり」

「端的に言えば、部室没収。一階に運んだ荷物等も戻しておいてくれ。すまないとは思っている」

「……了解しました」

お上に逆らうのは得策ではない。ちきしょう、権力ってやつはいつもそうだ！俺にまた筋肉痛になれというのかぁー！

「それでは、これで」

彼はそう言うのと二枚のプリントを俺に手渡して生徒会室に戻っていった。憂鬱な気分を引きずりながら渡されたプリントに目を落とす。内容は部活申請のキューアンドーエーだ。もう一枚の方は、『質問等は以下の連絡先まで』と生徒会へのアクセスとかが記されていた。

一巡目でふりだしに戻るを引き当てた気分だ。

一人のこされた室内で、何をするでもなく、机に突っ伏して天王洲と谷崎がくるのをまつた。

「その生徒会の使い、まさかそのまま帰してしまったんじゃないだろうね」

「ああ？」

しばらくしてから天王洲が鼻唄混じりで部室にやって来た。

数分前のいきさつを説明したとたん彼女はプリプリと頭から湯気をだして怒りはじめた。

「その彼を人質に取って生徒会に条件を突きつければよかったんだ。耳や目、それらをそぎおとして使えば、意外と一人で足りちゃうもんなんだよ、人質って」

「なに恐ろしいことほざいてんだ!？」

「ふっ、それがスキタイ流さ」

なにそのキメガオ、わけがわからないよ！

「さて冗談はさておき、本当にどうするんだい？このままじゃ娯楽

ら部は設立する前に廃部だよ」

「とはいえ、いつか言われるとは思ってたし」

「そんな寂しいこと言うなよ。この部がなくなってしまったら、宇宙人確保が遠退いてしまうじゃないか」

いい加減、あきらめろよ、まじで。

「つまり我々のとるべき行動は」

天王洲は立ち上がってホワイトボードに文字を書き、バンと叩いて強調した。

「この三つだ」

1、生徒会に逆らう

2、生徒会に従う

3、生徒会をシカト

「1は反発、2は服従、3は不法占拠を続ける。どれがいいかね」
「議論するまでもなく、2だろ。悪いのは俺らだぜ」

悲しくなってくる。高校は植物のような平穏な生活をしようと考えていたのに早くも目をつけられるとは、全部谷崎のせいだ。

胸に小さく抱える複雑な心境を知ってか知らずか天王洲は苛立ちを助長させるような笑みを浮かべた。

「しかし君、興奮するね」

「はあ？」

「生徒会バーサス非合法クラブ、くくっ、まさかこの身で体感できるとは」

たしかにフィクションの学園ものでよくある設定だが、

「ベタ過ぎて涙が出てくるよ」

俺から彼女にプレゼントできる言葉それだけだった。

「おっ、またせー」

この世の明るい気分を抽出したかのような笑顔で谷崎が勢いよく扉をガラリと開け部室に姿を表せた。

ようやくのお出まし、生徒会からの勧告についてなんて報告しよ

うか。

「遅かったね。琴音」

「ええ、ちょっと階段掃除のあと約束をとりつけてて」

ニコニコとややあって彼女は応えた。そのまま中央に配置された机まで歩いてくると、劇でも演じるかのように優雅に二回ほどクルリと回転した。意味がわからないその動作に俺と天王洲は啞然とする。

「うっ、ふふ。今日の私はねー、いつもよりハイテンションなのよー」

怪しい菓をやったみたいな笑顔のまま再びもう一回転する。

謎の行動に俺と天王洲は混乱の度合いを高めたまま瞳を合わせた。

「新入部員を紹介します！入ってきて！」

ジャンプしながらフィギア選手みたく空中で一回転する。お前バカだろ。回転する意味がわからな……って、新入部員！？

嘘だろ、まさかっ！？こんなダベるだけの倶楽部に！？

「失礼しますっ！」

驚愕のまま声が出せない俺を無視するからのように現状は流転していく。

一人の女生徒がおずおずと先ほど谷崎が意気揚々と入室してきた扉から入ってきた。ネクタイの色は俺たちと同じ、青。また一年生である。

「人形坂瑠花ともうします、よろしく願います！」

名前の通り日本人形みたいに可愛らしい女子だった。おかっぱ頭だが、古めかしさはなく、どこことなく気品溢れる立ち姿。幼さ残る端正な顔立ちがまた彼女の魅力を引き立てている。身長は横で品定めをしている天王洲と同じくらいで、かなり小さい。胸も。いや、いい意味でね。

先ほどまで頭を悩ませていた生徒会からの通告も、一瞬にして吹き飛んでしまうほどの驚きだ。

「趣味は読書です。友達からはよく抜けてる性格と言われますが、

とりえの元気で今日も一日がんばります！」

時刻は黄昏時を迎え、一日の終わりが刻一刻と迫ってくる時間帯だった。ちょっと彼女がなに言いたいのかわからない。

「る、瑠花ちゃんは七組の生徒で一番娯楽ら部にピッたしの気質をもってたのよ」

目が回ったのか、息も絶え絶えに谷崎が自己紹介に付け加えた。

娯楽ら部にピッタシの気質ということは問答無用でろくでもない人物になってしまふのだが、それでいいのだろうか。

「はい、至らぬことがあるかと思いますが、どうぞこれからメンバーとしてよろしくおねがいます」

「あのさ、谷崎になんて誘われたのかしらないけど、これだけは言わせてくれ」

活動内容の隠匿はフェアでないので、正直に人形坂さんにいままでの経緯と内容をかいつまんで説明しようとした時だった。

「ひっ！？誰ですか！？」

物凄い勢いのバックステップをみせられた。肉食獣の爪を掻い潜ったウサギみたいだ。

「えーと、娯楽ら部の暫定部員、みたいなもんかな。海野郁次郎っていいます」

「琴音！嘘つきましたね！」

さながら生まれたての小鹿みたいに震えながら、谷崎に向かって人形坂さんは怒鳴り付けた。

「あ、郁次郎のこと忘れてたわ」

「酷いです！」

半分涙目だ。一体どうしたというのか。

「えーと、郁次郎」

谷崎は小さく俺の名前をよんだ。

「瑠花ちゃん男の人が苦手みたいなの。だから彼女の一メートル以内に近づかないでね」

「はぁ！？」

なにその迷惑行為防止条令。

「瑠花ちゃん、それで大丈夫よね」

わけのわからない情報に呆けてしまった俺を置き去りに話は進展していく。

「あ、はい、大丈夫です。それだけ離れてれば」

「いやまあ、郁次郎は女の腐ったようなやつだから気にしないでね」
悪意はない。たぶん谷崎は言葉の意味を知らないで使ってる。

でも怒りがわいた。

「おい、どういふことか説明しろよ」

「僕も訊きたいな」

詳細を求める俺と天王洲。

「ん？瑠花ちゃんは極度の近眼で今メガネを修理中だから一メートルも離れたら人の顔がよく見えないのよ。だから郁次郎が男でも平気」

「そ、それでも少しだけ怖いんですけど」

谷崎の後ろで人形坂はおずおずと片手を挙げた。世の中には変わった人がいるもんだ。

「そ、それで郁次郎、さん、あの、なにか用ですか？」

所在無げな視線を空中に泳がせながら人形坂が効いてきた。

ああ、そうだったそうだった。

「この部活の発足の目的は『古今東西あらゆる娯楽を追求する』になってるんだけど、嘘おしえられてない？」

「どーゆーいみよっ！！」

谷崎が不満だたげに声をあらげたが、無視だ。てめえが正直に話すとは思えんからな。

「ええ、そのように教えられましたよ」

「あ、まじ」

とりあえず目の前の女の子は、俺のなかで谷崎、天王洲と同ランクである少し残念な少女に位付けされた、とここで明記しておく。

「話は終り？」

「あ、えーと」

「それじゃ、改めまして」

谷崎が仕切り直すよう手を叩いた。

「娯楽ら部によろこそ！人形坂瑠花ちゃん！」

にっこりと微笑みかける谷崎に答えるよう人形坂さんはペコリと会釈をした。

それにしても人形坂か、聞いたことのない珍しい名字だ、さては谷崎また珍名優先で勧誘したな。

「の前に一ついいかな」

華奢な彼女の第一印象は、押しに弱そう、というものである。恐らく谷崎の無理に押しきられたに違いない。『またかよー』という谷崎の視線を無視して、彼女の青春時代の保護のためしつかりとした意思をもってほしいものだ、手をあげた。

「人形坂さんはなんでこの部活に入ろうと思ったの？」

「ひっ」

人が話しかけるたびに軽く悲鳴を挙げるのはやめてほしい。微妙に傷つく。

「お、面白そうだからですよー」

抑揚がない端的な回答を鼻で笑い、

「嫌なら嫌だって言ってくれて大丈夫だぞ。辞めるなら今のうちだ」
「特にそういうわけではないですけど」

谷崎の洗脳の成果だろうか。心のこもったアドバイスは届かない。

「いやまじで、ろくでもないから考え直せって、なあ」

「ちょっと郁次郎、ちゃんと活動内容を伝えた上で瑠花ちゃんは参加したいって言ってるんだから何も問題ないじゃない！」

情報の非対称性について顔を真っ赤にして怒る谷崎、嘘についているわけではなさそうだ。

「ほーう、そうかい」

含みのある頷きを、わざとらしくしてから、再び人形坂さんのほ

うに向き直った。

「気を悪くしないで、正直に答えてほしい」

「ええ、大丈夫です」

「単刀直入に聞け。人形坂さんがこの発足しても、」

「名前」

想定外の割り込み発生。

「え？」

「下の名前で気さくに呼んでください。名字だどこの辺りがもやもやするんです」

彼女はそう言って胸の下を静かに撫でた。

「そ、そろそろ男子と馴れないと社会で生きていけないと家族に言われてきたんです。あの、郁次郎、さん、私のことは」

そこで小さく息をとま、気合いをいれてから彼女は続けた。

「私のことは瑠花と」

にこっ、じゃねえよ！

俺は基本的に女子を呼び捨てにしたりはしない。幼馴染みである谷崎でさえ、だ。

とはいえ、ここでの無言が長引けば女慣れしていないのがバレてしまいそうなので、気はずかしさをなんとか封じ込め、しどろもどろにならないよう言葉を選びながら続けた。

「……瑠花さんは、」

「呼び捨てで、い、いいですよ」

「ん、ぐっ」

吐き出しかけた息が暴発してしまい、俺の脳内はパニック妖精に支配される。

「ちょっと待ってられないか」

混乱の境地から救いの手を差しのべたのは、意外にも天王洲であった。

「人形坂瑠花、なかなか豪胆な性格のようだね」

「ありがとうございます。ここぞというときに肝が座っているって

お姉ちゃんにもよく言われてきました！ところで、あの天王洲愛流さんですよね？」

「む？僕を知っているのかい？」

キョトンとする天王洲に、表情を晴れやかなものにしながら人形坂……、あ、いや瑠花は、……くっ、やっぱり気恥ずかしすぎる！それはそうと俺以外のやつと相對するときは明るい元気な女の子といった様子だ。

「ええ、お噂はかねがね！この学校で天王洲さんのこと知らないないなんてモグリですよ！」

なんのモグリだよ。

「あーいやー、はっはは」

照れ笑いを浮かべて後頭部を掻く天王洲には悪いが少なくともいい噂の類いじゃないだろうな、と俺は勝手に解釈した。

「って、違う！僕をヨイシヨして話をそらす気だな！瑠花、なかなかの太鼓持ちだな」

「なんのことです？」

小首を傾げる彼女を無視して天王洲は、突然こちらを振り返り、ひしっと俺を指差した。

「は？」

いきなりのことでしたっ頓狂な声をあげる俺に構わず、偉そうに腰に余ったほうの手を当てた。

「郁次郎！彼女のことを瑠花と呼ぶなら、僕のこともしっちり愛流と読んでもらわなくちゃ困る！」

「はあ！？」

想定外な提案に目を丸くする。

「差別はよくないぞ！」

「な、なにいつてんだ天王洲！今まで名字だったのを急に名前なんてできるわけないだろ」

「君、言ってることが支離滅裂だぞ。簡単だろ呼称くらい」

軽く息をはきながら、やれやれと言った体で肩をすくめる。軽く

イラッ。

「フレンドリーに行こうではないか、郁次郎。僕はね、ここでこんなものを見つけてしまったのだよ」

彼女はそう言って、胸ポケットから使い古されたように表紙がヨレヨレの小さな手帳を取り出した。手帳といっても百貨で売ってる携帯できるキャンパスノートのようなものだ。表紙には流麗な筆致で『娯楽ら部ルールブック』と綴られるている。なにその頭の悪い説明書。

「見ての通り、先代娯楽ら部メンバーの取り決めが書かれているものみたいなのだが、ここに興味深いことが記されているのだ」

「えー、なににな」

谷崎が黄色い声をあげた。お前は部長のくせに知らないのかよ。

「曰く、部員同士は下の名前で呼び合うこと」

「はあ!?!」

「素敵!」

「いいですねー」

上から天王洲、俺、谷崎、瑠花の発言である。

「てめえ、パチこくなや!そんなバカみたいなルールあるはずが」手帳をひったくって調べてみる。一ページには、彼女の言う通り、意味のわからんルールが述べられていた。なんともうさんくさいわ、念のため中をぺらぺらと捲ってみる。ぎっしりと文字が書かれていてどうやら天王洲が無理矢理作ったものでは無さそうだ。

「疑り深いな、郁次郎。いいかい君、それは間違いなく代々この部活に受け継がれてきたものであり、」

「乳おっぱいってなんだよ!!!」

「は?」

適当なページに現れた文字列に対し、思わず声を上げて突っ込んだ俺に、女子から冷ややかな視線が与えられる。

「……」

「あ、いや、ちがう、手帳!手帳に書いてあるんだ!」

「いきなり下ネタ叫ぶのやめなよ、郁次郎。ドン引きだぞ」

「違うって、ほらここ！ここに乳おっぱいって！」

『美影↓乳』という謎の暗号を天王洲に指し示す。

「君！手帳に落書きするのやめたたまえ！これは前述の通り、受け継がれてきた由緒正しき娯楽ら部ルールブックなんだぞ！」

「細工する時間なんざなかっただろうが！」

大体、娯楽ら部は俺が記憶する限り、一代限りの出落ちクラブだったはずだ。

という俺の必死の訴えが伝わることなく、ヒソヒソと耳打ちしあう谷崎と瑠花の視線に耐えながらがつくりと肩を落として椅子に座りこんだ。

「とまあ、このルールブックに載っている通り、娯楽ら部では原則、名前で呼びあわなければならぬのだよ。ドウウウユウウアンダスタンニン？」

すっげーむかつく尋ね方だが、逆らう気も起きないくらい、俺は疲れきっていた。

「ああ、わかったよ、……愛流あいりゅう」

チキショー、やっぱりこっぱずかしい！てめーを呼び捨てするとモンスターをハントしたくなるんだよ！

「うむ！」

頷く愛流に殴りかかりそうになる衝動をぐっと抑えた。

「ねえ、いくじろっ」

「ん？」

谷崎が瞳をキラキラさせて「わたしは？」と自分自身を指差している。

「お前は谷崎だろ。一年後も十年後も、谷崎は変わらず、ずっと谷崎だろ」

「ちがくて、私のことは名前で読んでくれないの？」

「だから、今までずっと谷崎だったんだから谷崎でいいだろ」

「えー」

不服そうに唇を尖らせる彼女の後ろで天王……愛流がにやにやしながら「ちっ」と舌打ちをした。なんて器用なやつだろう。

「お話しそれてしまうかもしれませんが、私に質問があるって言ってましたよね？」

天使のような微笑を浮かべて瑠花がクリクリとした瞳で尋ねてきた。焦点があっていない。本当に極度の近眼らしい。

「あ、そうそう名前の話で流れてたな」

数分前の自分の行動なのに半分忘れかけていたよ。

「まあ、質問は単純にして明快なんだけど、ぶっちゃけ瑠花はなんでこの設立されてもない部活になんで入ろうと思ったんだ？」

「？ですから、楽しそうだったからと、」

「いや精神論じゃなくてさ。谷崎と昔から知り合いだったってわけじゃないんだろ？なんのギリがあって娯楽ら部に入部きめたんだよ」

「うーん、なかなかの懷疑主義者ですねえ。困っちゃいました」

微笑みを絶やさず顎に手をあてる瑠花。

彼女に悪いが、疑問はそれこそ星の数ほど浮かんてくる。

なぜ数ある部活のなかでウチなのか？

なぜよりもよってウチなのか？

なぜウチなのか？

……星の数ほどはなかった。

「だからさっきから楽しそうだからって言ってるじゃない？なにが不服なのよ郁次郎」

不機嫌そうに眉間にシワをよせながら谷崎が呟いた。

「あ、いえ、確かに楽しそう以外にも理由があることにはあるんです……」

「え、ほんと！？なにに？」

「んー、でもなー、言ったら絶対ひかれるもんなぁー」

「ひかないから！ねえ！教えてよーここだけの話！」

これ見よがしに言い洩る瑠花にものの見事に引っ掛かる谷崎。

「うーん、わかりました！正直に言いましょう！」

決心ついたように声をあげ、ワクワクを積もらせる俺たちに彼女は入部を決めた本当の理由をカミングアウトした。

「愛流がいるからです」

「はい？」

愛流、まだ呼び慣れていないのか、何処と無くイントネーションがおかしくなりながら告げられた名前。

「ふむ。る、瑠花、どういう意味だい？」

少しかだけ震えながら愛流は声をあげた。

俺と谷崎はというと、お互いにあぐり口をひらいたままだ。そうか、そういうことか、これが今はやりの百合というやつか。合点がいったぞ、だから彼女は男子が苦手なのか。嫌いではないが、好きでもない。しかしながら、ぶっちゃけ同性愛を手放して推奨出きる体質ではない。うん、嫌悪感は抱かないけど、目のと届かないところでやってほしい、とグダグダ考えている間に、瑠花は涼しい顔で続けた。

「オカルト全般に精通している愛流なら、私の目的達成に力添えしてくれるのではないかと」

やっぱり意味がわからなかった。

「む？君、それは果たして」

「ああ、簡単に言うと、私、オカルトマニアなんです」

「ほう」

関心言ったように頷く愛流。勝手に娯楽ら部の活動内容がオカルト研究部にされそうなのに、我らが部長は黙ったままだ。

「UFOやUMAに詳しい愛流とは一度あって話がしてみたかったです」

ああ、モグリって、そういうことだったのか。

「ふむ。しからば君は僕とアポロ月面着陸疑惑やロズウェル事件やケネスアーノルド事件について語り合いたい、というわけだね」

「ええ、そうです。ところでUFO関連ですと最近では三つの円盤がおもちゃみたいにクルクル回転しながら移動するやつが有名ですよね」

「ああ、あれか。あれも確かに面白いが一昔前のフライングワームとかフライングビューマノイドとかのほうが僕はロマンがあつて好きかな」

「クリッターみたいなのですか。ああ、未確認生物といえば私、けっこう日本の妖怪とかも好きでして、特に座敷わらしの捕まえかたとか知ってたら教えて欲しいな、なんて」

「座敷わらしといえば岩手の遠野だね。ここは河童なんかも有名だから河童イコール座敷わらし説なんてものもある」

「河童は地球外生命体なんて説もありますよね。あとこれは私見なんです、河童って、チュパカブラに似てませんか？」

「うーむ、ふむ、確かに。いやまてしかしチュパカブラの出身はゾンビと同じタヒチのはずだぞ。ここは河童というより……」

ニコニコと語り合う二人においてけぼり食らう旧メンバーの谷崎と俺。

水を得た魚状態の愛流に立て板に水の瑠花。君たち来る部活間違えてるよ。

「おい、止まれ。そこまでだ。ここから先は部活終りのファミレスでやってくれ」

終りが見えそうになかったので、とりあえず待ったをかける。これから先こういうかやの外が続くのは勘弁してほしい。

「あ、ああ、す、すみません。クラスで話ができる友達がいなかったらつい盛り上がっちゃいました」

舌を小さく出して謝られた。反省してるようならよかった。

「そうだ。忘れてたんだけど瑠花と谷崎に知らせとかなくちやいけないことがあったんだった」

小首を傾げる二人の横を抜け、俺は仕切り直すよう威厳を保って、ホワイトボードの前に歩みを進める。

「さっき天王洲とも」

「僕の名前は愛流だ」

「……愛流とも話あってたんだけどさ」
「やっぱり馴れない。」

「横暴だわっ！」

話を聞き終えた谷崎は開口一番不服を露にした。

「勝手が過ぎるわよ！ 罪もない青少年の健全なクラブ活動を妨げる理由がないじゃない！」

他のクラブに示しがつかないからだと思うけど角がたちそうなので黙っていた。

「そんな、所属する前に廃部なんて酷いですっ！」

瑠花にはオカ研への入部を進める。いそげ！

「だから、郁次郎とも話合っていたのだがね。こうなってしまうては生徒会メンバーの暗殺も辞さない」と

「そんなか会話してねえーぞ、俺！」

愛流め、調子乗りやがって。

「それにしてもどうしようか。さすがに勧告には従うしかないよね」
「少しだけつまらなそうに愛流が唇を尖らせていたが、気づかないふりした。てか、谷崎はなんだかんだで常識人なのだ！ たぶん！」

「活動自体はいくらでもでっち上げられるけど、設立メンバーはどうしようもないわね。あと一人、あと一人で足りるのに……」

「やべえ、俺も数に加えられてるよ。あれほど拒否ってきたのに。俺の気を知ってか知らずか、腕を組み頭を悩ませる谷崎は、ポンと手のひら叩き合わせて他のメンバーのほうを向いた。」

「愛流や瑠花の友達で娯楽に興味津々の子たちいない？」

「いるわけねーだろ。」

「僕は友達自体すくないからな」

「同じくですな」

あつ、なんかごめん。

だろうね、って思ったことはナイショだよ。

「そういう琴音はどうなんだい？」

「私の友達には、いないかなあ」

無駄に冷めたやつばっかだもんな。あと友達自体すくないし。

脳内だけで、会話に参加していた俺に望みを託すような視線が与えられていることに気づいた。

「あつ、おれ？」

首肯する三人の少女。

「えーと、そうだなあ」

娯楽に興味をもつてそうな奴は思い浮かばなかったけど、誘ったくらいでも参加しそうなやつらばかり浮かんだ。つうか絶対参加する。

『谷崎って、けっこういいよな』

バカな友人談だ。客観的に自分が置かれた状況を鑑みてみれば、答えは自ずと出てくるもんだ。

「いや、特に思い付かないなあ」

「そうかあ」

四人で溜め息ついた。

そう、今の俺の状況！

残念な思考回路の連中とはいえ、新人の人形坂瑠花はちんまいながらも端正な顔立ちをした美少女だし、ロリ巨乳でクールビューティーな天王洲愛流、そして頭空っぽでスペースに夢を詰め込んだ我が幼馴染み、谷崎琴音！

誰にしても土下座してまでお付き合いしたい方々ばかりだ。

今の俺って、夢にまでみた、あの、

「生徒会めっ！」

ダンと拳を机に叩きつけた。三人は一瞬驚いた表情を浮かべたがすぐに賛同してくれた。

「ええ、全くよ！ 私たちはきちんとした手順を踏んでるのに横暴だ

わっ！」

「卑怯ですよ。なんでここにきてそんな問題をもってくるんですか」

「生徒会ってのはまったく、ダメな連中ばかりだな」

その偏見の恨み節より、俺にとって大切なのは、どうやって今の状況を守り抜くかだった。

くそっ、生徒会め！俺のハーレムを邪魔だてさせてなるものか！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9861x/>

少女ジグザグ暴走中

2011年11月24日16時53分発行